

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかという気づきから使われはじめた言葉です。

いつのまにやら共生メンバー

ともに創り出した？いやいや自然発生？ 居心地の良い場所

甲賀市の地域共生社会の実現を考え、緩やかに動き出せる若者を育てることを目指して、7/25～8/29(毎週金曜日19:00～21:00)までの全6回の若者講座を開催しました。

運営スタッフが大切にしたいことは一貫して「対話」でした。回を重ねるごとに、今夜話す人との初めての対話であっても、気分の良い場所をお互いに作ろうとしてくれました。

6回の講義と対話のなかで「自分に何ができるかな」「自分だったらどうするかな」を考え、隣にいる仲間と分かち合う様

子は、いつのまにやら優しい景色に変わっていきました。

このあいまいで可能性のある「いつのまにやら〇〇〇〇」を生み出すには、完璧じゃなくても良い、失敗しても良いから挑戦しようとする若者を応援できる土壌づくりであると、認識を共有しました。参加受講者、運営スタッフ、差し入れなどの応援団、視きに来てくださった皆さんも「いつのまにやらメンバー」です。前号に続き、若者支援特集2としてまじめな学び、優しい笑顔を掲載しました。今後の展開が楽しみです。



大家族

ワカモノと新しい「あたりまえ」を創造する

甲賀市民

▲最終回の晴れやかな集合写真

▼3人のスタッフと中井さんからのラストメッセージ



中井さん

キョロちゃん

ゆうきちゃん

山本君が見た風景はこちら



▲夕陽も講座を応援

第6回 (最終回) 8/29

やってみたらこそ 見えた景色

ラストの講師は、運営スタッフが日頃の地域活動についてトークショー形式で発表しました。かたひじはらない、ゆるつとした雰囲気の中で、「始めは上手くいかなかったり、くじけたりすることがあっても、続けていくこと、やってみることが大切」と話してくれました。

トークショー後は、Last Dialogue～みらいのはなし～と題し、自分の叶えたいことを大きなことから小さなことまで、仲間と話す最後の対話でした。

エンドロールでは、6回の講座を振り返り、素敵な出会いと各々の成長を確認しあいました。

受講者の声

私はもともと場面緘黙症があり、今でも深く考えると黙ってしまう癖があるんだけど、この講座は優しいメンバーがそれをサポートしてくれて、話せるってなって人には笑顔を出せるくらいに話せました。

日々生き方悩みがグルグルして、忙しい中でも講座に参加した自分にも仲間にも拍手。この講座で会えた仲間は応援団。出会えたみんなが大好きです。いい未来へのお守り講座になったと思います。貴重な機会、経験を増やすきっかけをくださりありがとうございました。

第4回

8/15

できることから、やってみる



▲かふかの家 塚副施設長(左)とここのつす園 田中理事長

前半は講義形式で社会福祉法人 甲賀学園 鹿深の家の塚副施設長のお話でした。

塚さんは冒頭から「当たり前のことを言いますが、できないことは、できないんです。」「若い、やる気がある、夢がある……!」だからと言って、闇雲に手当たり次第「できそうなこと」をすればいいわけではない。大切なのは、明確な目的・目標を設定

することで、成功のイメージが持てるんですよ!と話されました。

塚さんは、「荒れたホールの立て直し」を事例としてお話くださり、人の一番深い所にある大切なものと向き合い続けた自身の体験談は、参加者の心に届いた様子でした。

後半は、田中理事長の進行で「こんな地域に住みたい!作りたい!」を考えるワークショップでした。付箋を用いて、まちの未来を想像し、「自分に何ができるか」を考える参加者の笑顔がとても印象的でした。



懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容
・いつのまにやら〇〇〇〇
・重層物語
・若者講座特集2
・スイートメモリーズ3

第5回

8/22

私を生かして、地域を活かす



▲やさしいまちづくり 総合研究所 前神有里さん

労働者協会の話は、参加者の若者も初めて聞く「新しい働き方」でした。

地域の課題解決や多様な働き方の実現を目指しながら、組合員の出資に基づく事業運営、出資金に関わらない組合員の平等な議決権というのは、「地域共生社会」の実現に向けての大切なキーワードです。



これはまさに「いつのまにやら」思考にぴったりの内容で、これからの人口減少時代を生き抜いていくためのポイントでした。

そして、「ゆるふわ」(ゆるい・ふわっと)という考え。いろいろなものが許され、包摂できる寛容性、まだないものの言葉にできないものをみんなで見つけて考えていく可能性のことです。



重層物語
スイートメモリーズ3

「サッとかけ湯をしてから勢いよくぬるま湯に浸かり、大きく息を吐いた。
(あの時、どうしてハイタッチをしたんだろう)」

笑ってしまつてくらに松田さんのペースに巻き込まれている。お隣の娘さんをうまく説得できたことが嬉しかったのか、松田フランクの実現をどこかで心待ちにしているのか。そもそも誰があの計画の実行を望んでいるというのだ、あんな無邪気にはしゃいだりして、私はどうかしている。

両手で湯をすくってジャブジャブと顔を洗い、松田さんに引導を渡すなら次がチャンスだと思つた。

【勝手な診断をするのではなく、福祉・医療の公的機関に相談すること】

私は仕事の合間に庁舎一階にある福祉課まで足を運んだ。

「いい民生委員さんなんですけどね、突っ走るといつか、決めつけちゃうところがあるんですよ。医者でもないのに診断のマネこまでしちゃうって……ええ大丈夫です、少し強めが丁度いいくらいです。はつきり伝えなきゃダメなんです。当日は私も同席しますのでよろしくお願いします」

決して裏切り行為ではない。どちらかといえば素行を正すふまいだご理解願いたいくらいだ。ただ、真つすな松田さんに比べて、私の小器用な立ち回りが鼻につく。

相談の日、根回しの甲斐もあって、福祉課の担当者ほうまくやつてくれた。人助けがしたいという松田さんの気持ちをごみ取り、適切なタイミングで相槌を打ち、辛抱強く聞いてくれた。十分すぎるくらいに聞いた後、弓をぎりぎりまで体に引き寄せて、矢を放つた。

「よく分かりますよ。でもね、餅は餅屋ですよ」

「……」
担当した職員は、やや我慢が過ぎたのかも知れない、我が身から離れた矢は正確に的を射る全くとって正しい指導が披露された。勝手な診断には危険が伴う、早期の病院受診が原則、夜間に本人を興奮させてどうする、家族をもっと介入させるべきだ、何かあったらどうする……

「なんかあったらって、何がありますね」

「あつてからでは遅いんですよ。あなたに責任が取れるのですか？」

「確かにワシは素人やけどなあ、責任があるからやりますね」

職員は私の方を向いて、「もう十分でしょう」と目くばせをしてから、松田さんにはほ笑んだ。一時間以上経っている、終了の合図に違いなかった。

「とにかく娘さんに連絡して、病院にかかりましょう」

腰を上げるよう松田さんを促し、職員に頭を下げながら庁舎を出た。ふと横顔を見ると、怒りではなく哀しい顔をしていた。

(あなたに責任が取れるのですか?)

押しの一手は、本来私から言いたいくらいのセリフだったはずなのに、どういつわけ聞く側になってみるとたまらないものがあつた。そのとき私は心変わりを始めたのかも知れない、よく分からぬ方向へと。

「なあ北島くんよ。追及されるはつかりが責任ちゃうんやで。責任は取られるもんやない、取るもんやで」

「取つてやりましょぞー」

駐車場の片隅で、私たちは肩を叩き合つた。

私はもう以前の私ではなかった。隣家から聞こえてくる相変わらずの独り言を聞きながら、眉を太く描く練習を始めた。運悪く現場を妻に見られてしまったが臆することはない。

「ごっだい、亡くなった終さんのご主人にそっくりだろう」

そう言つてやつた。

やがて妻の小言は減り、私にもずいぶん優しくなつた。ただ妻は、実家に連絡を取ることが増えているらしかつたが、もはや松田フランクの実行に向けて迷いはない。最後、三つ目の修正点さきクリアすれば、いよいよ本番だ。

【プライバシーを守ること。例えば、勝手に自治会長が音響担当として加わるようなマネは厳に慎むこと】

ここは妥協できない。今までの修正点とは少し様相も違う。終さん本人のプライバシーに関わる大事なことだ。これを改めないのなら、松田さんに憧れ続けることはできないだろう。

仕事を早くに切り上げて松田さん宅を訪ね、いつにも増して真剣な面持ちで端的に伝えた。「公的機関以外、人を巻き込むのはやめましょう。大村自治会長には外れてもらいます」

それは困る、それはあかん。チームなんやから」

「音響担当なら、松田さんがやればいいじゃないですか。そもそも音響なんて必要ないでしょう」

予想に反して、松田さんは食い下がつた。

「約束を果たさなあかんねん。ワシも大村さんも……」

亡くなった終さんのご主人と、大村自治会長、それに松田民生委員の三人は元同僚だった。高度経済成長期を駆け抜けた彼らは、みな次男坊で、故郷を離れ、それぞれが家庭を持つ、この新興住宅地に家を構えた。同じ職場、同じ団地、家族構成もほぼ同じ、夏休みにはマイクロバスを貸し切つて、三家族みんなで旅行に出かけた。盆も正月も、クリスマスもお花見も集まつた。子供にすれば家が三軒あるようなもので、気に入つた家で食事をし風呂に入った。

終わりはあつてなくやつてきた。あの日、終さんが切り出したことを憶えている。

「いつもの旅行やけど、ワシ一人で参加しますわ。なんや嫁さんが家族の時間を大事にしたい言つてな。まあ、子供ももう中学やし、すまんけど……」

特段、三家族のグループには名割がなかった、「いつもの」という冠で片付けほど誓つしのなかに溶け込んでいた。そこから妻たちが離れ、順に子供も離れていった。当時はそれほど悲観することもなく、「男三人で楽しめる旅行があるつてもんよ」と傾きかけた景気の中で、何かが崩れゆく予感に抗つて、精一杯息巻いてみせた。

終さんは、亡くなる少し前に意味深な言葉を遺した。

「夏休みがなあ、すぐ過ぎてしまふなあ。ワシら間違つてたんやろか……共同体とは、なんぞや……」